
新宗教における高齢化の問題

—老後の経験の諸相—

アイリーン・バーカー¹

(翻訳：高橋 原²)

1960年代以降に現われた新宗教運動を無償の奉仕によって支えてきた若い入信者たちが高齢化した現在、諸教団はどのようにして運動を維持していくのかという課題に直面している。本稿では新宗教運動の年齢構成の変化に注目してこの問題を概観する。

¹ Eileen Barker：ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・名誉教授

² たかはしはら：東北大学実践宗教学寄附講座・准教授

君はまだ僕を必要としてくれるだろうか。
僕を食べさせてくれるだろうか。
僕が64才になっても。(ポール・マッカートニー 1967)

若いままでいられるものなどない。樫の若木が節だらけのがっしりした大木に育っていくのと同じことが宗教にも起こる。もっとも、中には成熟を迎えずに死んでいくものもある。いずれにせよ、高齢化のプロセスにはそれぞれに独特の特徴があるにせよ、時間の経過とともにある程度の頻度をもって現われるパターンというものがある。本稿では新宗教とそのメンバーが必ず迎える高齢化のプロセスの中に見出される多様性と、繰り返し現われる傾向とを、ともに検討する。

新宗教運動

少数派の宗教やスピリチュアル・グループは、「カルト」「セクト」「新宗教運動」などとさまざまな呼ばれ方をする。それぞれの呼称にはそれぞれに意図があり、ある特定の潜在的特徴を言い当て、別の特徴を捨象している。社会学の文献では、カルトとセクトは、広く社会に受入れられているか、緊張関係にあるかの度合いに応じて、そして排他主義的か普遍主義的かの度合いに応じて、「チャーチ」「デノミネーション(教派)」と区別されてきた (McGuire, 2002, 5章; Stark and Bainbridge, 1987, p.328)。もっとも、日常的な用法としては、カルトにしてもセクトにしても、話し手がその宗教や集団に対して否定的な評価を下していることを示唆している。この理由から、社会科学者たちは、1970年代前後に、世間の注目を集めるようになったさまざまな非伝統的あるいは代替的な宗教を包括する概念として、より中立的な用語である「新宗教運動 new religious movement」を用いるようになった。実際的な目的のために、「新」という言葉を第二次世界大戦後に顕在化した宗教を指すも

のとして用いた者もいる (Barker, 1989, p.145)。またある者は、社会の周縁部に位置する運動を指すとしたものとしてこの語を用いたので (Melton, 2007, p.33)、エホバの証人、モルモン教、キリスト・アデルフィアン派^①などの19世紀の宗教のみならず、西洋で顕在化したのが最近である宗教も同じ「新宗教」に含めている。しかし、それらは他国においては数世紀あるいは数千年も前から何らかの形で存在してきたかも知れないのである。

どちらのアプローチにも長所と短所がある。しかし、歴史学者でメソジストの牧師でもあるJ・ゴードン・メルトンが、新宗教は、新宗教同士よりも、母体となった伝統とより多くの類似点を持っていると主張したことを踏まえて (Melton, 2004)、私は別のアプローチのほうがよいと考えた。これは、おそらく私が、歴史学や神学ではなく、社会学の訓練を受けてきたからであろう。私は新宗教が生まれ出てきた伝統を理解することが重要だというメルトンの主張に同意する。我々が関心を持つ多くの新宗教が、一般社会と対立関係にあるということにも同意できる。そしてまた、現代の新宗教の中には数えきれないほど多様な信念と実践があるというのも確かであろう。しかし、第一世代のメンバーがいるという意味で、新宗教は実際に「新しい」のだと考えれば、新宗教同士に共有される特徴が確かにありそうだと考えてもよいだろう (Barker, 2004)。

メルトンによるこの議論を踏まえて、私は、新規の入信者 (converts) がメンバーの多数を占めていることが顕著な運動として新宗教を定義することがますます有益になってきていると考えるにいたった。定義に関わるこの特徴を独立変数として、これ以外に、時代と地域を問わず新宗教運動が発生した時に常に付随し得る特徴とは何なのかを問うことができる^②。さらに言えば、逆説的なことであるが、このアプローチによって、とりわけ人口統計的に (それだけではないが)、新宗教が新しさを失っていくというありがちな行く末のいくつかを検討することができるようになるだろう。

第一世代の運動としての新宗教運動

まずはじめに、新宗教運動を一般化して語るというのは無謀なことになり得るということを指摘しておかなければならない。明らかなことであるが、それらは、母体となった伝統や、それぞれの信念や実践、社会の他の部分との関係において、たがいに異なっている。しかし、そうは言っても、それらの運動に共通するある種の特徴を探してみることはできる。第一世代の新宗教運動に関して第一に気づくことは、入信者達は、その宗教の信者として生まれた人々よりも熱心で、活動的であるという傾向である。第二に、新宗教というものは典型的な一般人からはずれたタイプの人々にアピールするものであることが多い。過去において、新宗教はしばしば社会的、経済的、あるいは政治的に抑圧された人々を惹きつけ、彼らに千年王国的な期待や、現世あるいは来世でのよりよい暮らしを差し出すものであった。しかしながら、本稿の議論にとって重要なことであるが、1960年代後半から1970年代初期に西洋に現われた新宗教の波は、中産階級の若者達にアピールしたのであった。もちろん、それに当てはまらない場合もあり、ペインブリッジとスターク (Bainbridge and Stark, 1980) がクライアント・カルトと呼んだような、より年配の人々にアピールする諸運動もある。そこでは信者達は運動が提供するサービスに対して金を払っていただけるだけの収入があることが期待されている。しかしながら、一般的に言えば、共同体生活をしながら運動のためにフルタイムの仕事を続ける入信者のほとんどは、20代に偏っている。こうした運動としてもっとも顕著な例を挙げるとすれば、英国と米国の統一教会信者の入信時の年齢は、1970年代を通じて23歳前後できわめて一定しており (Barker, 1984, p.198-99, 206, 291) ⁽³⁾、信者の平均年齢は1976年で27才であった (図1) ⁽⁴⁾。

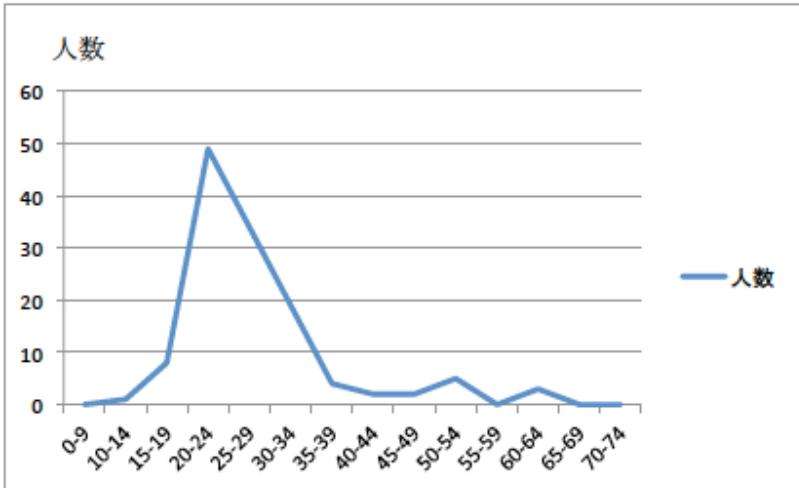


図1 英国統一教会信者の1976年における年齢構成⁽⁵⁾

第三に、通常、新宗教運動を率いているのは、信奉者によってカリスマ的権威を与えられており、規則や伝統による制限を受けることがなく、そして、おそらく神以外には予測も説明もできない行動をする創始者である。第四に、多くの新宗教運動、とりわけロイ・ウォリス (Roy Wallis, 1984) が現世拒否型の運動に分類したタイプの運動は、神と悪魔、善と悪、そして、重要なことに、「彼ら」と「我々」との間にはっきりとした区別を設ける二元論的な世界観を持つ傾向があり、結果的にメンバー達は地理的にはないにせよ社会的に、社会の他の部分から切り離されることになる。第五に、そう驚くべきことではないが、運動が代替的なヴィジョンと生活様式を提供するかぎりにおいて、その集団と社会の残りの部分との間、とりわけ入信した家の人々と、現状維持を望む人々との間に、緊張が生じがちである。

第六に、これが本稿の中心的なテーマであるが、新宗教は、古くからある既成の宗教よりも、はるかに速く、激しく変化する。通常、それは運動の中にまもなく第二世代が生まれてくるという時期に生じるが、禁

欲や産児制限を行なうためにこれが生じない運動もある。しかし、カリスマ的創始者が死に、最初の者達が年老いていき、運動のメンバーの年齢構成が顕著に変化していくのは避けられないことである⁶⁾。

人口統計の変化の諸相

一つの際立った例を挙げるならば、1970年代初めの《神の子供たち》(Children of God、現在はファミリー・インターナショナルとして知られている)のメンバーの平均年齢は23歳であった。メンバーには子供はおらず、30歳以上の者はほとんどいなかった。すなわち、若い者達には扶養すべき家族もおらず、責任から自由であり、世界中を旅して「リットネス (litnensing)」——誰であれ話を聞いてくれる相手に冊子を売り、証しを立てること——することができた。しかし、1970年代半ば以降に強調された信念体系には、運動の創始者デヴィッド・バーグ (David Berg, 1919-1994) が「愛の法則」と呼んだ、他者の性的欲求を満たすことを勧める教説が含まれていた。これは運動のメンバー同士での「シェア」だけではなく、外部の潜在的入信者に対しても向けられ、「ナンバ勧誘 flirty fishing」として知られた実践だが、1987年まで続けられた (Chancellor, 2000; Lewis and Melton, 1994; Williams, 1998)。この運動は避妊を認めなかったため、まもなく第二世代が生まれることとなり、これらの子供たちの養育に時間と金が使われるようになった。

1990年代後半までに、平均年齢は20年前とほぼ同じであった一方で、メンバーの年齢構成は劇的に逆転した。大半を占めていた20代でのメンバーはほとんどいなくなっていた (Bainbridge, 2002, p. 23-26)。代わりに、年齢的に離れた二つの世代が現われた。一方には数が増えていく子供たちがおり、他方には年齢を重ねていく多数の信者たちがいた。かれらは運動に留まって、引き続き勧誘に熱心であったものの、フルタイムの布教者となる新しい入信者の獲得はできなくなっていた。2010年までに、メンバーの年齢構成はさらに重要な変化を見せ、最初の入信者達

信者数

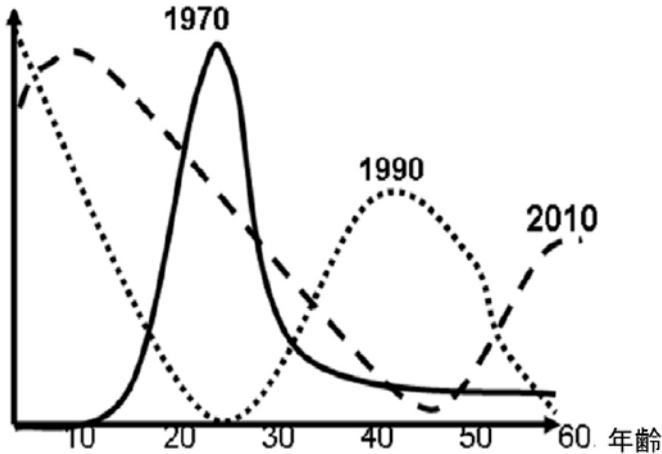


図2 《神の子供たち》／ファミリー・インターナショナルのメンバーの年齢構成の変化

の平均年齢は50代半ばから50代後半となり、第二世代の成人メンバーが運動の組織と運営の責任を負う立場についていた（図2）。

これとは幾分異なるパターンが見られるのが、西洋仏教僧団友の会（FWBO = Friends of the Western Buddhist Order, Triratna）の年齢構成の変化である。この運動はサンガラクシタ（Sangharakshita、本名デニス・リングウッド Dennis Lingwood, 1925-）によって、1960年代後半にイギリスで創始された。この時期は統一教会が西洋人を惹きつけて入信者を集め出し、また、《神の子供たち》がカリフォルニアで始動した時期であった。西洋仏教僧団友の会もまた、熱心な若者達にアピールし、1976年までに、メンバーの平均年齢は男性が29.7歳、女性が35.1歳であった。しかしこの教団のセックスへの態度は《神の子供たち》とはまったく異なるものであった。禁欲は入会の条件となっていなかったもの

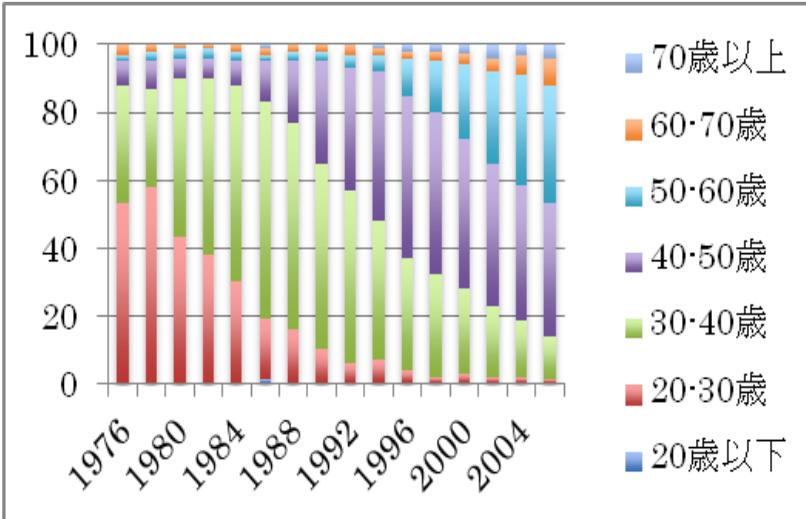


図3 西洋仏教信団友の会の会員の年齢分布（1976年～2007年）⁽⁷⁾

の、メンバーのうちより信仰の堅い者たちは禁欲の誓いを立てていた。そして、異性の存在しない共同体がもっとも安定するという信念に基づいて、男女の分離を是とする文化が支配的となっている。

この結果として、2007年までにメンバーの平均年齢は、男性が49.3歳、女性が51.7歳となっている⁽⁸⁾。図3は、この年月の間に、20代がほとんどいなくなり、30代は急速に消えつつあり、すぐに50代が標準的なメンバーとなっていくことを示している。教団のメンバーで、これらの統計をとったロカバンドゥ（Lokabandhu）が指摘しているように、現在の傾向が続いた場合、30年後の平均年齢は75歳前後ということになる。

論理的には、新宗教運動が長期にわたって若年層のメンバーを維持し続けるためには二つの方法がある。一つは第二世代のメンバーを生むことである。もう一つは新しいメンバーを定期的に獲得し続けることである。しかしながら、そのどちらも、運動の将来を安定させるには不十分である。子供を多く残したいいくつかの新宗教運動においては、子供達はできるかぎり早く運動を離れていく傾向にあった。《神の子供たち》と統一

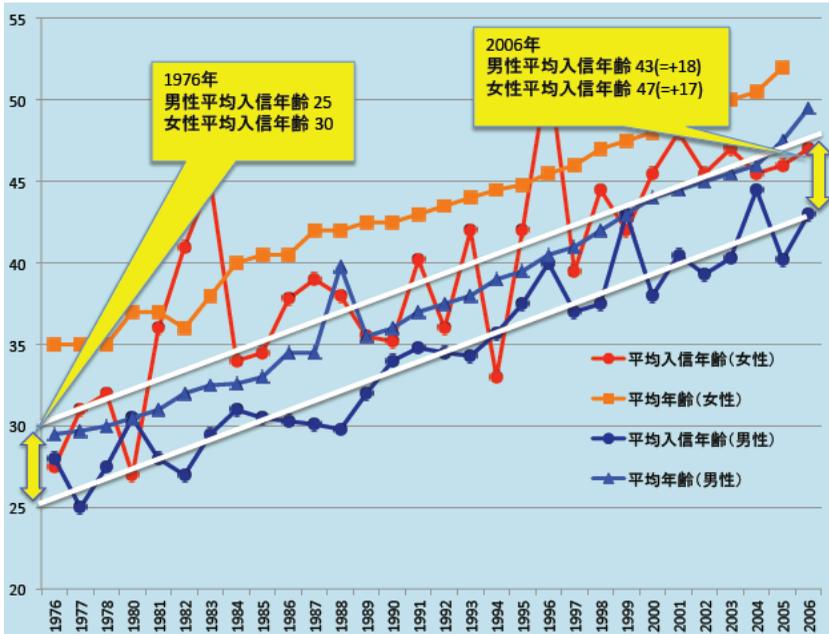


図4 西洋仏教僧団友の会の会員の平均年齢と平均入信年齢 (1976年～2007年) ⁽⁹⁾

教会の第二世代の最初の群はまさにそうであった（もつとも、どちらのケースでも、子育ての習慣や運動を包む文化が根本的な変化を遂げた結果、第二世代の中の次の群は、少なくとも運動との関わりを保ち続ける傾向にある）⁽¹⁰⁾。

第二の、信者獲得という方法にも限界がある。カリスマ的指導者が最初に若者を惹きつけて運動に入信させるとしても、入信者達が惹きつけるのは自分と同年代の人々となる傾向がある。彼らが年を取るのに応じて、新規の入信者も高齢になっていく。図4から見てとれるように、西洋仏教僧団友の会はこの傾向を示す顕著な例となっている。過去40年間にわたり、会員の絶対数は増加し続けているが、入信の平均年齢は1976年には男性が25歳、女性が34歳であったのが、2006年には男性が43歳、女性が47歳となっている。そのようなパターンが続いていけば、この運動はあと数年間成長を続けるかもしれないが、ピークに達した後は世紀の終わりを待たずに消滅する可能性もある——当初は成功を収めたものの消

滅していったシェイカー⁽¹¹⁾など過去の新宗教や、最近では、メンバー達が地上での永遠の生を期待していたパナシア教会 (Panacea Society) ⁽¹²⁾などがその例である (Shaw, 2011)。

新しい動き

もちろん、生活条件の向上と医学の進歩によって、世界中で平均余命が伸びており、社会の中で労働人口に依存する高齢者が増加している (DWP, 2010; Harper, 2012) ⁽¹³⁾。100歳超の人々が増えるという目標を掲げても、福祉国家がそれに対応できるのかどうか懸念を表明しているのはイギリスの政治家達だけではない。しかし、より古い主流宗教のメンバーが人口統計上の一般的な変化に多少なりとも影響されたとしても⁽¹⁴⁾、一般論として、彼らが、創立から半世紀やそこらしか経っていない現代の新宗教運動の入信者ほど劇的な変化を経験することはないだろう。一つの理由は、古い宗教の方はこの問題をずっと以前から認識しており、対応を考えてきたからである。あえてこう言ってしまうてもよいかもしれない。他の条件が同じならば、長い歴史を持つ宗教運動ほど、すでにメンバーの高齢化の問題を見据えて制度的な準備を整えることができている可能性が高く、運動の発足当初には到来を予想できなかったような、より幅広い不測の事態が生じても対応ができるのである。

しかしながら、すでに述べたように、新宗教運動をひと括りにして述べることはできない。高齢になった信者のニーズにできるだけ長くこたえていく責任を負うことにはっきりと抵抗を示しそうな団体がある一方で、それが切迫した問題となる前に余裕を持って備えているところもある。後者の例として、星雲大師 (1927-) が1967年に開山した佛光山がある。台湾南部のこの教団の本部を案内してくれた中年の尼僧に、働くことができなくなった僧侶達はどうなるのかと質問したところ、すでに無料の医療プログラムが整備されており、子供と高齢者が暮らすホームも建設してあると説明された。実際に彼女の母親 (尼僧ではない) は尼

僧院の高齢者用施設に居住しており、毎日の訪問もできるとのことであった。台湾の他の仏教系新宗教運動では、1966年に釈証嚴（1937-）によって設立された慈済会もまた、高齢の信者だけではなく、助けを必要としている他の人々の面倒も見ていることで知られている（Schak and Hsiao, 2005）。

それにもかかわらず、多くの新宗教運動において奉じられている信念やライフスタイルの中には、結果として高齢化の問題を悪化させ得るものも含まれている。第一世代の信者は、入信した当時ほどは健康な状態ではないであろうが、それだけではなく、彼らは医療保健にも加入していないし、年金の受給もできないだろう。入信した若者は学校を中退して運動を支えるためにフルタイムで働く場合が多く、教育によって得た資格もないし、後の人生で「外部の職」を探そうとしても履歴書に書けるような職歴はない。生家とは縁が切れていることが極めて多く、将来地元に戻っても助けてくれる伝手は見つかりにくい。

さらには、遠い旅の先々で共同生活を繰り返す放浪生活の結果、第一世代の信者は公的な地位を持たないことが多い。自分の名義で不動産を所有したことも、賃貸したこともない。クレジットカードを持ったことも、公的給付を請求したこともない。しばしば彼らは自分がどこにも籍がない存在であることに気づく。あつたとしてもそれは現住所から遠く離れた国々でのことにすぎない。国家の観点から見れば彼らは存在しないも同然で、ゆえに市民に与えられた法的権利を要求する資格もない。とりわけ終末の時代を生きていると信じる運動において、このような事態は深刻なものとなる。

千年王国への期待

歴史を通じて、千年王国への期待というのは新宗教運動によく見られる特徴である。何度も期待を裏切られていき、最終的に信仰が捨てられることもあるが、むしろ一般的には、より穏当な形で預言が成就される

ことに期待が移っていく傾向にある。古い宗教運動は、いつだかわからないが未来のある時点で、この世界が一夜にして劇的に変わるという信仰を保持しているものの、その日が間近であるかのように行動することはまずない。しかし、新宗教運動においてはそれが緊急で切迫したものであると実感されることがある。信者たちは、「その日」が数カ月か数年以内、いずれにせよ自分が生きている間に起こると予想し、正確な日付を信じている場合もある。そのように信じているので、将来の生活に備えることは無意味であるという信念を持つようになる。実際、将来に備えることは信仰の欠如であると見なされることもある⁽¹⁵⁾。

そのような態度は《神の子供たち》の例に現われている。初期の頃からメンバー達は、イエスの使徒達に倣って共同生活をしながら「同じ鉢」で食事をした⁽¹⁶⁾。彼らは家を買わずに賃貸し、現金収入に頼らず賞味期限切れ食品のような商品を「調達 provision」した⁽¹⁷⁾。この種のライフスタイルが、「神が与えてくださる (God will provide)」という堅い信仰と結びついたので、老後の計画に関心を払う信者がほとんどいなかったのは驚くべきことではない。結局のところ、彼らは近くイエスが再臨することを期待しており、その時にイエスを救世主として認めた人々全員ともに、自分の肉体は「携挙 Rapture」、すなわち主イエスに中空で会うために変化するというのである⁽¹⁸⁾。しかし21世紀に入り、メンバー達は依然として「終末」を生きているのだという兆候を見出していたものの、自分達の世代がこの世界に生きる最後の世代であるという確信は徐々に揺らぎ始めており、彼らにイエスの再臨はいつになるのか尋ねてみれば、自分達の世代かもしれないが、孫達の世代になるかもしれないという答えが返ってくるだろう。

21世紀になり、終末が近く到来することへの疑念もあいまって、第一世代の信者が多くのもを求めて運動にますます依存するが、運動はそれらを与えることができないのではないかという可能性が自覚されるようになってきた。65歳以上になった少数の高齢者達は、比較的容易に共同住宅において養われていたが、第二世代のメンバーが数において第一世代を上回り、生活上の決定事項をめぐる多数決に勝つような段階に入

ると、世代間の対立が生まれてきた。

このことを始めとする多くのことが進展し、ファミリー・インターナショナル（《神の子供たち》の現在の名称）は2010年に一連の大きな変化を経験した。これは運動内部で「リブート Reboot」として知られている。その中には、もう正会員になるために大きな住宅での共同生活をする必要はなく、すべてのメンバーはより小さな、独立したユニットでの生活を選んでよいという指令が含まれていた。この変化は、共同生活で余生を過そうと考えていた古参のメンバーにとっては不安の種となった。

2010年の年末にかけて、一つには両世代によって表明された懸念に答える形で、もう一つには「我々にまだ、30年、50年という時間が残されているかのように準備を開始せよ」という主の教えが指導者にもたらされたことが明らかになったために、ファミリー・インターナショナルは『高齢のファミリーメンバーのケア』と題された内部文書を発行した。このことは、次のような事実から生じた問題に答える必要を認めたものであった。一つは、第一世代が現世で予想以上に長生きすることになるかもしれないという事実、もう一つは、「リブート」がもたらした変化のために、高齢のメンバーは必ずしも共同生活のセーフティネットをあてにすることができないという事実であった。

図5に示されているように、高齢化していく信者を支えていくには法外な費用がかかりそうだということが統計的に明らかになっていた。10年以内に、月額300ドルというそこそこの年金を65歳以上のメンバーに支給するために必要な費用は、年額300万ドルに上り、さらに5年後の2025年には、600万ドルを上回ることになる。

ファミリー・インターナショナルには1954年以前生まれのメンバーが1000人以上おり、彼らの高齢化に伴うニーズに対応するには時間がないということを認識した指導部は、すでに遅きに失してはいたものの、将来計画の真剣な検討に乗り出した。指導部は、切実に支援を必要としているメンバーに対して、過去数年間にわたって非常事態に備えて貯めていた資金から補助を出すことを約束したが、それだけでは近い将来に助けを必要とする年齢に達する人々のニーズを満たすには到底足りない

2010年の年齢	2010年の人数	2010	2015	2020	2025
51-55	788				788
56-60	680			680	680
61-65	188		188	188	188
66-70	18	18	18	18	18
71以上	18	18	18	18	18
65歳以上総計		36	224	904	1692
年間コスト（ドル） [1人当たり 3600ドルとして概算]		13万	81万	325万	609万

図5 ファミリー・インターナショナルが65歳以上のメンバーに年金を支給する
のに要する費用⁽¹⁹⁾

いうことも認識していた。そこで「高齢者のケアのための投資委員会」を発足させ、最善の投資と、使用できるあらゆる資金の最善の配分を検討する権限を持たせた。同時に「高齢者ケア担当」を置いて、さまざまな国々の年金制度と医療給付を得る可能性の検討に入った。この目的のために、指導部はメンバー全員に対してアイデアを共有することを求め、将来的な状況の悪化を防ぐようないかなるプロジェクトにも乗り出すことを提案した。さらに、個々のメンバーが良好な医療的ケアやその他の給付を受けられ、健康保険に加入することができる国に移住することを考えてもよいという提言を行なった。さらに先を見据えて、若い信者達と二世代のメンバー達は、現在、一人一人が将来に備えて計画を立てることを奨励されている（Amsterdam, 2011）。

高齢化という経験の諸相

ファミリー・インターナショナルは何年もの間、貯蓄を行なっていなかったが、これが普通だというわけではまったくない。莫大な富を蓄えている新宗教運動は存在する。しかし、それは少数のエリートからなる

指導部に握られていて、それを獲得するために汗水垂らした一般のメンバー達は困窮したまま捨て置かれているかもしれない。ローズ（仮名）が1960年代半ばにそのような新宗教運動に加わった時に、彼女は若い助産師であった。彼女は世界を旅して、ある時期にはラテンアメリカで地区のリーダーを任されたこともあった。今では80歳を過ぎて、50年以上を運動のために捧げてきたが、食費とサウスロンドンに借りた部屋の家賃を支払うために汲々とする毎日である。唯一の安定した収入は国の年金だが、最低額に抑えられている。外国暮らしが長かったためにそれ以上の受給資格がないのである。もともと、彼女は、心配してくれる元メンバー達から（入会期間がごく短かった人からも）小額の支援を受けることができている。しかし、彼女は今でも運動のために働いているにもかかわらず、運動からは経済的支援をまったく受けていないのである。その状況について問われると、ローズは悲しそうに、自分はただ神様におまかせしているのだと微笑むのである。

指摘すべきポイントは二つである。第一に、ローズの事例はある特定の新宗教運動に属する実在の人物に基づいているが、他の新宗教運動のメンバーについても似たようなストーリーはたくさんある。第二に、ローズの属している運動の第一世代の信者達の全員が同じように困難な状況にあるわけではない。運動に献金しなかった財産を相続している者もいるし、自分で働くか、運動とは関係のないビジネスを行なっている者もいる。そして、責任ある立場で運動のために働いている人々は、将来に備えて年金の掛け金を支払うだけの給料は得ている。しかしこれは長く続いてきた習慣ではないので、古参のメンバー達は、引退後の生活費を賄う年金を得られるだけの掛け金を支払う機会を持って来なかったのである。

しかし例外もある。もしもある新宗教運動が、外部の人々を雇用できるほどにまでビジネスを拡大することができれば、これらの非会員達は法定の最低賃金、年金プラン、ことによっては医療保険も受けとることができ、このことがはずみになって、非会員とともに働くメンバー達も同等の利益が得られる可能性が高くなる。このような事例として、ワシ

ントン・タイムズのような統一教会系のビジネスがある。これは十分長く継続しているので、会員に対して引退後の生活を支える年金を受給するに足る給料をすでに支払ってきている。

あるペイガン（Pagan、新異教主義）のグループでは、また違った状況が生じている。彼らはばらばらに生活し、より広い社会の中で働き、仲間の実践者と出会う機会は儀式を行なう時だけである。しかし年齢を重ねるにつれて、同じ精神を持つ者同士でもに過ごす必要を大きく感じるようになったとしても、他の実践者と出会うことが難しくなっていく。この理由から、人生最後の日々を過ごすための高齢者用のホームを建設する可能性を探りはじめたペイガン達もいる。病院やホスピスに暮らすペイガンへの訪問を勧めるウェブサイトもあり⁽²⁰⁾、仲間に向けて高齢者との養育縁組みを勧める広告も見られる⁽²¹⁾。しかし現在のところ、高齢になったペイガンのニーズはようやく表に出始めたばかりである。ペイガン・フェデレーション（Pagan Federation）のように、ドルイド・ネットワーク（Druid Network）は、ヨーロッパと北米を中心に世界のグループ同士をつないではいるが、高齢者のための組織的な取り組みは行っていない。しかし、会員がボランティアの病院チャプレンに応募するのを支援したり（これはしばしば成功している）、会員が病人や高齢者の介護などを通じて地域の共同体と関わりを持つことを奨励したりしている。

すでに言及したように、トリラトナ（Triratna、かつてのFWBO=西洋仏教僧団友の会）は、教団の高齢化に関する広汎な調査を行ってきた。この一つの帰結として生まれたのがアバヤラトナ・トラスト（Abhayaratna Trust）である。その目的は次のとおりである。(a)貧困と困難に見舞われているとりわけ高齢のメンバーを支援すること。(b)保護施設、ホスピス、森林地帯の埋葬地を建設する新しいプロジェクトのための資金募集。(c)メンバー相互の感謝の念に具体的な形を持たせること⁽²²⁾。

1990年代後半から、問題が差し迫っているという自覚がシャンバラ（Shambhala）のメンバー達の間に見られるようになってきた。シャンバラは1960年代後半にチベット仏教の瞑想指導者であるチョギヤム・ト

ウルンパ・リンポチェ (Chögyam Trungpa Rinpoche, 1939-1987) によって設立された新宗教運動であったが、現在は仏教の瞑想センターの国際的共同体となっている。1998年に運動によって実施された調査によれば、すでにシャンバラのメンバーの20%は60歳以上であり50%は45歳から60歳である。この調査には、これらの高齢化したメンバーのうちかなりの割合が比較的貧しいのは、入信した若い時期に時間とエネルギーをキャリアやビジネスのために使わず、シャンバラ (当時はヴァジュラダートゥ Vajradhatu) の成長につき込んだためであることも示されている。

さらに、高いレベルのケアを必要とする老人を対象とした既存の介護施設などは、シャンバラの理念にそって運営されることは望みにくく、ゆえに瞑想にふける老後の生活には向かないということも指摘された。また、身体的、精神的な制約がある高齢の実践者が、シャンバラのセンターにどの程度通うことができるのかも不透明であった (Whitehorn, 2009)。ワーキンググループが1998年に発足し、高齢化についての経験と知恵を共有し、深めるために、シャンバラのウェブサイト上のフォーラムでメールによる議論を開始した。本稿執筆の2012年の時点で、運動のブログには、高齢者の共同生活施設の運営に関心を持つ人々を対象とする5日間のワークショップの広告が掲載されている⁽²³⁾。

教団主導の試みは、1960年代にバグワン・シュリ・ラジニーシ (Bhagwan Shree Rajneesh, 1931-1990) のまわりを集った弟子 (サニヤシン) 達を中心にインドで始まったラジニーシ運動にも見られる。1981年にバグワンはアメリカに移住し、物議をかもした6万5000エーカーのコミュン、ラジニーシプーラムを、オレゴン州アンテロープ近郊のビッグ・マディ・ランチに建設した。しかしながら、これはサニヤシンたちが行なった数々の違法行為のために解体され、オショー (バグワンの当時の呼称) は1987年にインドに戻り、数年後に死んだ (Carter, 1990; Fitzgerald, 1986; Fox, 2000)。

今日では、運動は、世界各地の、程度の差はあれ自律的な集団によって構成されている。彼らは集まってオショーの著作を読み、瞑想などのさ

さまざまな実践を行なっている。2010年にサニヤシンの一人が手紙を書き、「ラスト・リゾート（最後の砦）」となる居住施設が建設されてもよいのではないかと述べた。そこでは、彼女や他のサニヤシン達が「最後の日々を仲間たちに世話してもらえる。すなわち、自分たちが肉体を離れる時には、愛と喜びと、音楽とダンスによって送られるのだと安心して、旅立ちの準備を自覚的に進めることをサポートしてもらえるのである」（Maneesha, 2010）。翌年、イングランドのダヴオンで開かれた会議では、このアイディアに圧倒的な支持が表明され、実現可能性について検討を始めることが合意された⁽²⁴⁾。

西洋の他の新宗教運動には、善意と試案の段階から一步を踏み出して、高齢者のメンバーのために備えを始めたところもある。ガスキン（Stephen Gaskin, 1935-）が仲間達とともに1971年に設立した「ファーム」は、1960年代のカリフォルニアのヒッピー文化の中から現われた共同体である。早くも1991年に、ガスキンはファームに隣接した100エーカーの土地に、ロシナンテ・ヘルス・センター（Rocinante Health Center）として知られている「エコトピアな老後生活」を送るための施設を建設する計画を立てた（Gaskin, 1991; Miller, 2012, p.21; Neville, 2007）。全生活をファームですごすことができる住人は、キャビンか住宅を自分で建てなければならず、生活費は自分で賄い、ロシナンテへの会費を月10ドル払う必要があった。2008年までに7人の住人がいたと報告されている⁽²⁵⁾。

ほとんどとは言わぬまでも、多くの新宗教では、信者にいくつかの層がある。運動のために生活を捧げて労働し、時には運動内部で共同体生活をする中核メンバーの層があり、次にその外側の信者の層がある。彼らは外の社会で働きながら生活し、献身の程度と頻度には差があるが、運動が主催する講演や研修、儀礼などを通じて運動に関わっている。これは多くの伝統的宗教運動における聖職者と会衆の関係と似ていなくもない。そのような運動の一つに、1930年代後半にレクラージ・クブチャンド・クリピラニ（Lekhraj Khubchand Kirpalani, 1877-1969）によってインドで設立されたブラーマ・クマリス（Brahma Kumaris）がある。この

運動は、まだ初期の入信者によって運営されており、当然ながら、彼らは現在ではきわめて高齢になっている。この運動の中核は主に、独身生活を送り、共同ホームに暮らしている女性達から成っている。彼女達を支えるのは「学生」と呼ばれる、外の社会で働いて独立した収入を得ている外部のメンバーからの寄進である。ブラーマ・クマリスの高齢のメンバーが運動からどの程度のケアを期待できるかは、一人一人が現役の時にどの程度運動に貢献したかに大きく左右される。メンバー達の中には、運動がインドに保有している病院で余生を送る者もいる。

しかしながら、とりわけ運動が、西洋医学あるいはアロパシー医学（逆症療法）ではなく、代替的、補完的、あるいはアーユル・ヴェーダによる治療の効果を信じている場合には、病者や高齢者への支援提供が結果的に外の社会から批判を受ける場合もある。たとえば、1989年にマリー・テレーゼ・カスターノ（Marie-Thérèse Castano, 1945-）によって南フランスに設立された恵まれない人々のためのホルス・コミュニティ（Horus community）の事例がある。カスターノ夫人を含む三人のメンバーは、死亡した二人の修道女を病院行かせるべきであったという判断に基づいて、違法治療で有罪判決を受けた。死亡した修道女は死に場所を求めに来たのだというホルスの古株メンバーのコメントが伝えられている。

あの人達は、チューブに繋がれて病院のベッドで独りぼっちにされるのではなく、自然の中で、美しい木々に囲まれ、古くからの友人達に見守られて最期を迎えることを選んだのです（Palmer, 2011, p.130-140）。

近代以前の高齢化の経験の諸相

すでに示唆したとおり、古くからある宗教の方が、高齢化したメンバーのケアという課題にうまく対処しやすい。宗教が社会の他の部分から

孤立を続ける程度に応じて、高齢者は身近な家族や地域の会衆を老後の生活の頼りにしている。ジョン・ネルソン・ダービー (John Nelson Darby, 1800-1881) が19世紀前半に設立した「排他的同胞団 (Exclusive Brethren)」は、何世代にもわたって運動の中で生まれ育ってきたメンバーがほとんどであり、いまでは新宗教運動とは呼べない。社会学者であればこの運動を、その名が示すとおり、主流のキリスト教から分離し、できるだけ社会からも距離を保っている19世紀のセクトであるということだろう (Wilson, 1967)。換言すれば、このグループは、神と悪魔、善と悪だけでなく、「我々」と「彼ら」をはっきりと区別する二元論の世界観など、(全てではないにせよ) いくつかの第一世代からの特徴を保持しつつ、「教派主義化 (注10参照)」への圧力に抵抗してきた昔ながらの新宗教運動の一つである。グループ内部の人々は、このことによって強い家族意識と仲間の信者達への信頼感を増してきた。メンバー達は高齢化すると、自分の子供達や近い親戚のそばに転居し、子供達の家の離れか、あるいは敷地内に立ててくれた「おばあちゃんの家 Granny homes」に暮らす者も多い。身寄りのない高齢のメンバー達のためには、地域の会衆が当番で食事を用意し、礼拝に連れていく。同胞達が語ってくれたところによると、運動を離れた人々でさえも、かつて縁を切り、もう食事もともにせず、最低限の会話しか交わさなくなった運動のメンバー達によって、物質的な面で面倒を見てもらえることもあるという。

ヤコブ・アマン (Jakob Ammann, 1656頃-1730頃) に率いられたスイスのアーミッシュ教会の起源は、17世紀後半の再洗礼派の分裂にさかのぼる。18世紀初期に、多くのアーミッシュはアメリカに移住し、伝統的に田園の共同体の内部で家族ごとの住宅に暮らした。住宅には祖父母が暮らすための、「おじいちゃんの家 Dawdi Haus または Grossdaadi Haus」がついていることが多い。彼らはそこで、変わることはない社会構造の中で、自分達の習慣や生活様式を守っていくことができる。これは老人用の施設に入居したらとてもかなわないことである。孤独感や、もはや共同体の一員ではなくなったと感じるという問題はほとんど生じない。生活の経済面について行政の支援はまったく必要ないが、医療費

だけは必要に応じて親類や教会が払っている (Hostetler, 1993, p.167-170)。

アーミッシュより少し早く、17世紀半ばのイングランドでは、ジョージ・フォックス (George Fox, 1624-1691)、ジェイムズ・ネイラー (James Naylor, 1616-1660) らが、クエーカーとして有名なフレンド会を設立した。数十年の間、運動は過激な分裂主義をとり、社会との緊張関係は深刻であり、残酷な暴力と迫害に曝された。しかし、意識的に主流文化から大きな距離をとり続けたアーミッシュとは異なり、クエーカーは社会に寛容な態度をとるようになり、社会の方も徐々に彼らに対して寛容になっていき、今日ではほとんどのクエーカー達が外の世界で生活や労働をしている (Isichei, 1967; Pink Dandelion et al, 2010) ⁽²⁶⁾。それでも、フレンド会は高齢の会員のためにイングランドと世界の諸地域にホームを建設した。ハートリッグ・オークス (Hartrigg Oaks) は、ヨーク近郊の150エーカーの土地に150以上のバンガローが点在する老人用住宅地であり、ジョゼフ・ラウントリー・ハウジング・トラスト (Joseph Rowntree Housing Trust) によって運営されている⁽²⁷⁾。住人達は (クエーカーでなくともよい)、比較的若く、活動できるうちに引っ越してくることを奨励されるが、コミュニティには専用のケア・チームが置かれており、必要に応じて各戸の住人の世話をする。ケア・センターもあり、より集中的な介護が必要となった人々に対応している⁽²⁸⁾。

しかし、全ての古い宗教がメンバーの老後に備えているわけではない。主流の宗教であっても、生涯をその宗教の神のために捧げた人々が、老後には放って置かれているということもあり得るのである。AP通信の記事に、メソジスト、バプテスト、プレスビテリアンの聖職者の事例が紹介されていた。彼らは「引退後の生活保証の危機に直面」している。彼らは月300ドルの年金収入では医療費と光熱費が賄い切れず、しばしば食べるにも事欠くこともあるという (Carpenter, 2010)。ある牧師は、按手式の際に主教に言われたことを思い出している。「あなたには常に、老後にも素晴らしい計画が用意されています—死後の永遠の命です」。

しかし、「神様が面倒を見てくださる」という広く行き渡った態度は、死を目前に控えた時期にとっては、必ずしも説得力のあるものではない。

誰が高齢のメンバーに責任を持つのか

誰が高齢のメンバーに責任を持つのかという問いには、幅広い答え方が可能である。答えは、そのメンバー個人や運動の種類によっても違い、メンバーが属している社会によっても異なってくるだろう。高齢者を養うのは、（地方自治体であれ一国の政府であれ）国の役割であると考え人々がいる。また、そのメンバーが生涯を教団に捧げた程度に応じて、宗教団体が（地方レベルであれ、国レベルであれ、国際的レベルであれ）責任を持つべきであると考え人々がいる。そして、宗教運動の元メンバーが、就労生活のかなりの部分を運動に捧げてきたのだから、運動が彼らに何らかの借りを返されなければならないという主張は珍しくない。しかし、高齢となったメンバー一人一人が自分で責任をとるか、あるいはその家族が面倒を見るべきであると考え人々もいる。メンバーの子供として生まれたが成人に達すると運動を拒絶して離れていった人々の中には、まだ「中にいる」両親まで拒絶するわけにはいかないと考える人々もいるのである。また同じようにメンバーの子供として生まれ、まだ運動にとどまっている人々の中には、運動を離れていったものの老後の備えができていない両親（祖父母の場合もある）を支えなければならないと考えている人々もいる。もちろん、第一世代の信者で、さまざまな理由から子供のいない人々もいる。ラジニーシ運動、シナノン (Synanon)、サイエントロジーのシー・オーグ (Sea Org) などのように、禁欲、避妊、不妊手術、堕胎等を運動が勧めてきた場合もある。

法的手段

新宗教運動のメンバー（より多くの場合元メンバー）の中には、運動に加わったことで手放してしまった金銭や財産を取り戻そうとして、あるいは、運動に捧げた何年にもわたる労働への何らかの補償を受けとろうとして、法に訴える人々もいる。サイエントロジーの元会員の中には、賃金遡及や入会時に交わした10億年契約の無効を求めて訴訟を起している人々もいる。2010年に、合衆国地方裁判所は、元会員の夫婦が100万ポンドの賃金遡及を求めたとされる裁判でサイエントロジーに有利な裁定を下した（Gardner, 2010）。しかし、裁判所は原告が宗教のスタッフメンバーとして働いていたと認定し、次のように述べた。

合衆国憲法修正条項の「宗教の自由な活動条項」と「国教樹立禁止条項」の関係から、ある法令が宗教団体による聖職者に関する雇用決定と抵触する場合には、例外的にその法令を適用しないことになる⁽²⁹⁾。

このように、仮に原告が連邦および国家の禁ずる不法労働があったと裁判所に認めさせることができたとしても、「聖職者の例外」が適用されるという裁定が下された。これはたとえば、「清貧の誓い」を立てた修道士、修道女達には賃金を支払う必要がないという形で、カトリックの修道院に適用されている例外と同じことである。

ヨーロッパと北米では、（数は少ないがサイエントロジーと統一教会の脱会者の例など）和解が成立した事例もいくつかある。しかしこれらは比較的まれなケースであり、原告には運動に関わっていた間の経験について口外してはならないという「箝口令」が条件になっていることが多い。しかしながら、日本では事情がやや異なっている。統一教会や、オウム真理教、愛の家族、神慈秀明会などその他少数派の宗教の問題に活発に関わっている弁護士グループがあり、「失われた青春」への補償を求めた脱会者が裁判で勝訴した例がある。

不幸なダヴィディアン達（彼らの多くは後に、デヴィッド・コレシュ（David Koresh）に率いられ、テキサス州ウェコのブランチ・ダヴィディアン（Branch Davidians）事件においてFBIの攻撃によって焼死した）の中には、引退後の介護資金のために十分の一税を2倍支払っていた者もいた。彼らは当時の指導者フローレンス・ハウテフ（Florence Houteff）が組織の解散を決めた時に、裁判所に払い戻しを求める訴訟を起したが、積立金は訴訟費用と弁護士報酬で消えてしまった（Pitts, 2009, p.57-8）。脱会者が結束して運動に対して集団訴訟を起す例がまれにあるが、たいてい不成功に終わっている⁽³⁰⁾。

高齢化していく信者にとって、法律による賠償の望みはほとんどないが、その理由はいくつかある。年老いた一般のメンバー達の中には、訴訟を起す手続きを知っている者はほとんどおらず、無報酬で働いてくれる弁護士が見つからないかぎりには、弁護士を雇うこともできない⁽³¹⁾。ファミリー・インターナショナルのようなケースでは、裁判に訴えてもほとんど意味がない。原告が勝訴しても、賠償金どころか、訴訟費用に充てるだけの財産も運動側には残っていないのである。一方で、巨額の財産を蓄積している運動の場合は、裁判を闘うために敏腕弁護士を雇っておく資力を有しており、財産は遠く手の届かない場所に隠すか、信頼の置ける身内や信者にあずけてしまうのである。

神学的立場とスピリチュアルなニーズの諸相

高齢の信者の面倒を見るのに必要とされる財政的ニーズと身体の保護とは別に、ある運動の信念体系が育むものである死や先祖の世代への態度が、高齢化していく信者（そして彼らの扱われ方）に影響する重要な要因となる。キリスト教に基づいた新宗教運動は、新しいエルサレムや地上における天の王国の実現を期待するのでなければ、天国における来世を期待するか、あるいは永遠の劫罰を恐れることが多い。イスラム系の新宗教運動には、真の信仰者、とりわけ老年を待たずに殉教者として

死ぬ覚悟を決めた者は、必ず天国に行けると約束するところもある。ニューエイジやペイガンの宗教には、東洋の宗教のように、何らかの輪廻転生を信じており、個人は現世での行ないに応じた条件でこの世界に戻ってくるとしているところもある。そして、前述のように、自分の運動がこの世界での永遠の生の秘密を発見したと信じている人達もいる。このことは、少なくとも原則として、ある人々にとっては、70年の天寿に近づき、そこに到達し、それを過ぎていくときに、大きな幸福の源泉となり得るのである。しかしながら、これが却って心配を増してしまうような人々もいる⁽³²⁾。

アーミッシュの説教の中でもっとも際だっている教義は、「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」（「出エジプト記」20章10節、「エペソ人への手紙」6章2節、「コロサイ人への手紙」3章20節）という一節であり、彼らの共同体は長老達が支配するものとして描かれてきた（Hostetler, 1980, p.167）。ペイガン達は老年と死を、生の自然なサイクルの一部であると考えている。しかしながら、一般的に言って、東洋の宗教と文化の方が、西洋の「先進国」に見られるよりも、高齢の者を敬い、面倒を見るように思われる。先述した僧院、佛光山の創設者は、中国の格言を引用して述べている。「家に老人がいるということは、高価な宝石を所有しているようなものである（家有一老 如有一宝）」（Yun Hsing, 2011, p.41）。中国人、ヴェトナム人などのアジアの諸国民は、祖先崇拜の強い伝統を有しており、死んだ先祖達が生前と同じニーズを持っているかのように扱うのである⁽³³⁾。

1998年に、クリシュナ国際意識協会の会員の中の終末期の患者向けに、心・身・霊にわたる専門的なホリスティック・ケアを提供するホスピスの設立を強く主張した同協会の信者が書いている。

帰依者にとっては、他の信者に見守られながら肉体を離れるということは、神の慈悲であると見なされる。そして巡礼の地で肉体を離れることは、地上の生の成就である。今までのところでは、世界

中に存在する帰依者達の間で、死、死にゆくこと、死別は、クリシュナ国際意識協会が、協会として共有施設を提供しなければならないほどの数には達していない (Dom, 1998)。

現在ではホスピスや緩和ケアに関するクリシュナ国際意識協会の出版物が多数あり、インドでは信者を対象としたホスピスケアが提供されている⁽³⁴⁾。しかし他の地域では、運動の善意にもかかわらず、ほとんどの信者は公的あるいは私的なヘルスケアサービスに頼っている。

老化していく新宗教運動の未来の諸相

いかなる社会運動であれ、その未来を予言しようという試みは無謀なことである。新宗教運動について検討した上で、なお一般化して述べられることがあるとすれば、それは、一般化はとてもできないということだけである。そうは言っても、宗教社会学者が問いたくなるようないくつかの問題があり、彼らが見てとることができそうな数多くの傾向がある。

最初に問われるべき問題は、ある特定の新宗教運動（教団）が生き残るのかどうか、であろう。ロドニー・スターク (Rodney Stark, 1996, p.113) は、「1000の宗教運動があったとして、10万人の信者を惹きつけ、1世紀の間続くのはそのうちでたった一つくらいであろう」と述べている。運動がそう簡単には成功しないのには多くの理由があるが、その一つが、それらが主流社会との間に経験する軋轢である (Stark, 1987, p.13)。しかしここで我々が関心を持つのは、それらがどの程度新しい入信者あるいは次世代との世代交代を果たすことができるのかということである。すでにみたように、西洋仏教僧団友の会 (FWBO/Tiratna) は、「高齢化のために消滅する」という危機に瀕しているという自覚を持っている新宗教運動の一つである。しかしながら、この問題を見据えて、この運動は若いメンバー達に運動の中でより重要な役割を担わせることに

よって状況を打開しようと、数多くの手だてを講じている。

だが、もしも運動が本当に存続していくのに必要な会員数を維持、もしくは増加させることができるとしたら、（絶対にというわけではないが）その運動は少なくともある程度は、教派主義化しており、「我々」と「彼ら」の間のはっきりとした区別はゆるやかなものとなっているに違いない。ファミリー・インターナショナルと統一教会が第二世代のメンバーの最初の群を送り出した後に遂げた変化に、そのようなプロセスが示されている。さらには、運動のために労働する第二世代のメンバーの中には、生活資金について運動や仲間達と交渉を行ない、将来の年金や医療保険の積み立てを行なっている者がかなり多くなっている⁽³⁵⁾。

ある信仰への信頼性が時の経過とともに薄れていくということもある。これは特に千年王国への期待が裏切られた時に生じやすい。ことによると予想していたよりも「明日」はあるのではないか、そのために、とりわけメンバーが高齢化していくことに備えるべきなのではないかという認識が徐々に芽生えていく。千年王国的でなくとも、第一世代の比率が圧倒的に高い運動は、切迫した必要が生じるまではメンバーの高齢化に備えていない場合が多い。そして、そのような時が来た場合の対応方法は千差万別であり、遅きに失した介護制度の整備を試みるころもあれば、責任逃れの方法を研究するころもある。

1970年代前後に共同生活を送る運動として始まったものの、現在は様変わりしたいくつかの新宗教運動に見られる一つの展開は、上層部からの指示とは無関係に、メンバー個々の家庭がある地域に集まるという傾向である。そこでは、運動のヒエラルヒーとは関係なく、メンバー同士が集まり、物質的にも、そしてより重要なことかもしれないが、精神的にも支え合うことができる。さらに興味深いことに、元メンバーとその家庭も集まる傾向にある。

このような「自助」傾向は、明らかに、インターネットの発達によって促進されている。電子メールや、あるいは盛んになってきた Facebook によって、メンバーや元メンバー達は互いにアドバイスを送りあい、実用的、あるいは精神的な性質の支えあいを行なっている。実際に、こう

した新しいメディアが水平方向において持つ意思伝達と動員力の大きな可能性は、西洋において1970年代に始まったほとんどすべての新宗教運動を、すでに大きく変容させている。そして、将来的なメディアの発達がすべてのレベルにおいて、今後新宗教運動に影響していくことはほとんど疑いがない (Barker, 2005; Campbell, 2006; Cowan, 2007; Dawson, 2001)。

結論

第一世代のメンバーを持つという新宗教運動の定義から出発した本稿で見てきたことは、そのような運動はある共通特徴を持ちやすいということであり、その中には一般人の典型から外れる特徴も含まれる。もっとも、メンバーの特徴が一般人とどう異なるのかは、運動によっても、時期や場所によっても異なっている (Lewis and Bauman, 2012, p.196)。しかしながら、1970年代前後に西洋に姿を現わしたそのような新宗教運動の多くは、ヤングアダルト層に不相応な要求を突きつけた。これら若い入信者達は、個人で持っていた財産はすべて運動に寄付し、とりわけ、いわゆる「現世拒否的宗教」に加わった人々は、学歴や職業も棄てて、運動に全生活を捧げた。彼らはほとんど、あるいはまったく報酬を受け取ることがなく、ほとんど、あるいはまったく明日のことを考えてもいなかった。

当然のことながら、これら若い入信者達は時の経過とともに年齢を重ねてきており、21世紀の最初の10年が過ぎる頃には中年後期にさしかかっている。彼らは何年もの間、年金受給の積み立てをせずに働いてきたかもしれない。また医療やその他の偶発事に備えて保険に入ることもしてこなかったかもしれない。医学的な問題を抱え始めている者もいるし、将来に対する不安を感じ始めている者はきわめて多い。住む場所さえ不確かなケースもある。彼らは同じ信念や価値観を共有する人々から切り離されて、ひとりで、あるいはスピリチュアルな意味での孤独の中で死

に向き合わなければならないという心理的不安を経験しているかもしれない。人生を捧げた運動に見捨てられたと感じている人々もいるかもしれない。また彼らは、若い頃に抱いていた神学的信念が、どうやら高い期待に見合う結果をもたらさなかったことに対して失望しているかもしれない。

他方では、物理的にも社会的にも安全で快適な環境で、仲間の信者達が心理的、精神的ニーズを満たしてくれるような老後を楽しみに待つことができる新宗教運動のメンバー達もいる。

本稿では、20世紀の後半に西洋に現れた何百もの新宗教運動のうちほんの限られた数を取り上げることしかできなかった⁽³⁶⁾。しかし、これら数少ない事例からも示されたように、ある新宗教運動の人口統計的な特徴が描く正確な軌跡は、多くの変数によって異なってくる。それでも共通に見られる一つの特徴がある。それは、入信者が年をとるにつれて、運動内に高齢のメンバーが増えていくことはほとんど避けられないということである。そして彼らは徐々に他者への依存を深めていき、一方で、自分では運動全体の繁栄には乏しい貢献しかできなくなっていくのである。

この研究のために調査を開始した時、私は多くの新宗教運動に、メンバーの高齢化に備えて行なっている対策について質問をした。すぐに明らかになったのは、問題があるかもしれないという自覚が驚くほど欠けているということであった。自宅あるいは共同体の施設で面倒を見られて幸せに暮らしている老人達が運動の中にいるという事実を指摘する者もいたが、インフォーマント達が認識していなかったように思われたのは、ごく少数の扶養対象者（ほとんどは指導者の立場にある者）を世話することと、多数の扶養対象者を世話することとはまったく異なるということであった。年齢構成の変化が何を意味するのか、まったく腑に落ちないようであった。しかしながら、私が発したほんのわずかな数の質問だけでも、いくぶんかは、「意識向上」に結びついた。そして中年の第一世代の入信者達に、今後問題が生じるということを受容してもらうのは難しいことではなかった。また、多くの第二世代のメンバー達

は比較的若く、運動の中で生まれ育ったために外の社会の経験があまりないにもかかわらず、自分達が高齢のメンバー達を支えるために頼りにされるだろうということと、「明日のことを気にかけておく」ことも必要かもしれないということ、よりはっきりと意識していた。

本稿は、新宗教運動が直面しやすい年齢構成の変化に伴う課題だけではなく、その課題に向かい合う方法を決定するきわめて多様な要因のうちいくつかを強調してきた。そこには、運動の内部と外の社会とに見出される社会的、政治的、経済的、文化的環境も含まれる。このテーマについてはさらに多くの研究がなされなければならないが、それによって新宗教運動そのものだけでなく、それを研究する社会学者に対しても、課題が突きつけられることになるのである。

出典：本稿は以下の論文の翻訳である。

Eileen Barker, "Ageing in New Religions: The Varieties of Later Experiences." *Diskus: The Journal of the British Association for the Study of Religions* (ISSN: 0967-8948), 12 (2011): 1-23.

<http://www.basr.ac.uk/diskus/diskus12/Barker.pdf>.

なおこの論文は以下の書籍にも収載されている。

Karl Baier, Franz Winter (Hg.) *Altern in den Religionen*. Vienna: LIT Verlag. 2013: 227-260.

謝辞：翻訳と掲載を許可して下さった著者ならびに関係出版社とイギリス宗教学会、またグラフの掲載を許可して下さったロカバンドゥ氏に感謝する。(『現代宗教』2014 編集委員会)

文献

- Amsterdam, P. (2010) *Care of Elderly Family Members*, Internal communication distributed by The Family International, 30 November.
- Amsterdam, P. (2011) *Update on Care of the Elderly Program*, Internal communication distributed by The Family International, 21 June.
- Amsterdam, P. (2012) *Family Birthday 2012*, Internal communication distributed by The Family International, 18 February.
- Bainbridge, W.S. and Stark, R. (1980) "Client and Audience Cults in America." *Sociological Analysis* 41(3): 199-214.
- Bainbridge, W.S. (2002) *The Endtime Family: Children of God*. Albany, NY, State University of New York Press.
- Barker, E. (1984) *The Making of a Moonie: Brainwashing or Choice?* Oxford, Basil Blackwell.
- Barker, E. (1989) *New Religious Movements: A Practical Introduction*. London, HMSO.
- Barker, E. (1999) "New Religious Movements: Their Incidence and Significance." Pp. 15-31 in *New Religious Movements: Challenge and Response*, edited by Bryan Wilson and Jamie Cresswell. London, Routledge.
- Barker, E. (2004) "What Are We Studying? A Sociological Case for Keeping the 'Nova'." *Nova Religio* 8(1): 88-102.
- Barker, E. (2005) "Crossing the Boundary: New Challenges to Authority and Control as a Consequence of Access to the Internet." Pp. 67-85 in *Religion and Cyberspace*, edited by Højsgaard, M.T. and Warburg, M. London, Routledge.
- Bird, F. and Reimer, W. (1983) "Participation Rates in New Religious Movements and Parareligious Movements." Pp. 215-38 in *Of Gods and Men: New Religious Movements in the West*,

- edited by Eileen Barker. Macon, GA, Mercer University Press.
- Bown, C., Strole, J. and Bernadeane (n.d.) *Together Forever: An Invitation To Be Physically Immortal*. Scottsdale, AZ 85260, People Unlimited Inc.
- Bromley, D.G. (ed.) (1988) *Falling from the Faith: Causes and Consequences of Religious Apostasy*. Newbury Park CA, Sage.
- Campbell, H. (2006) "Religion and the Internet." *Communication Research Trends*, Centre for the Study of Communication and Culture 25(1): 1-24.
- Carpenter, D. (2010) "Clergy seem an unlikely group to be facing a retirement security crisis." *Associated Press* 3 June.
http://www.msnbc.msn.com/id/37493788/ns/business-personal_finance/t/many-clergy-not-ready-retirement/
- Carter, L.F. (1990) *Charisma and Control in Rajneeshpuram: The Role of Shared Values in the Creation of a Community*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Chancellor, J.D. (2000) *Life in The Family: An Oral History of the Children of God*. Syracuse, NY, Syracuse University Press.
- Coates, S. (2011) "Welfare in Chaos as Thousands Live to 100: Ageing population creates budget time bomb." *The Times* 4 August: 1, 9.
- Cowan, D.E. (2007) "Religion on the Internet." Pp. 357-76 in *The Sage Handbook of the Sociology of Religion*, edited by James A. Beckford and N. J. Demerath III. London, Sage.
- Dawson, L.L. (2001) "New Religions in Cyberspace: The Promise and Perils of a New Public Space." Pp. 35-56 in *Frontier Religions in Public Space*, edited by Côté, P. Ottawa, University of Ottawa Press.

- Department for Work and Pensions. 2010, June. *When should the state pension age increase to 66? A Call for Evidence*. London, DWP. <http://www.dwp.gov.uk/docs/spa-inc-to-66-call-for-evidence.pdf>
- Dom, H.T. (Hari-dhama Dasa) (1998) "Spiritual Need, Pain and Care: Recognition and Response in ISKCON." *ISKCON Communications Journal* 6(2).
- Duquesne, A. and Willems, L. (1997) "Enquete Parlementaire visant à élaborer une politique en vue de lutter contre les pratiques illégales des sectes et le danger qu'elles représentent pour la société et pour les personnes, particulièrement les mineurs d'âge." Brussels, Belgian House of Representatives.
- Fitzgerald, F. (1986) *Cities on a Hill*. New York & London, Simon & Schuster.
- Flaccus, G. (2010) "Ex-Scientology lawsuits reveal elite Sea Org group." *Associated Press* 27 March. <http://www.wrn.org/articles/33008/>
- Fox, J.M. (2000) *Osho Rajneesh*. Salt Lake City, Signature.
- Gardner, D. (2010) "Scientologists make their followers 'work as slave labour,' according to lawsuits by two former members." *Mail Online* 28 March. <http://www.dailymail.co.uk/news/article-1261386/Scientologists-make-followers-work-slave-labour-according-lawsuits-members.html>
- Gaskin, S. (1991) "Rocinante: A Commune by and for Elders." *Whole Earth Review*, Fall. http://findarticles.com/p/articles/mi_m1510/is_n72/ai_11259058/.
- Harper, S. (2012) "Long lives and low birth rates are a problem across the West." *The Independent* 31 January.
- Hostetler, J.A. (1993) *Amish Society*. Baltimore, John Hopkins University Press.

- Isichei, E. (1967) "From Sect to Denomination among English Quakers." in *Patterns of Sectarianism: Organisation and Ideology in Social and Religious Movements*, edited by Bryan R. Wilson. London, Heinemann.
- Krause, N. and Bastida, E. (2009) "Exploring the Interface between Religion and Contact with the Dead among Older Mexican Americans." *Review of Religious Research* 51(1): 5-20.
- Krause, N. and John Cairney, J. (2009) "Close Companion Friends in Church and Health in Late Life." *Review of Religious Research* 51/2: 181-200.
- Lewis, J.R., and Melton, J.G. (eds.) (1994) *Sex, Slander, and Salvation: Investigating The Family/Children of God*. Stanford, CA, Center for Academic Publications.
- Maneesha. 2010. "The Last Resort: A Hospice for a Meditative Transition." *Osho News Online Magazine*.
<http://www.oshonews.com/2010/09/last-resort/>
- Melton, J.G. (2004) "Toward a Definition of 'New Religion'". *Nova Religio* 8(1):73-87.
- Merrill, R.M., Baker, R.K., Gren, L.H. and Lyon, J.L. (2009) "Health and Missionary Service among Senior Couples in the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints." *Review of Religious Research* 51/2: 156-165.
- Miller, T. (2010) "The Evolution of American Spiritual Communities, 1965-2009." *Nova Religio* 13(3): 14-33.
- Neville, T. (2007) "Birds of a Feather." *New York Times* 6 April.
- Nilsson, S. (2011) "Rebooting The Family: Organizational Change within The Family International." *International Journal for the Study of New Religions* 2(2): 157-78.
- Palmer, S. (2011) *The New Heretics of France*. Oxford, Oxford University Press.

- Pink Dandelion, B., Cooksey, E. and Handrick, F. (2010) "Why some religious groups accommodate to the world and others do not: a case study of Quaker and Amish trajectories." Paper presented at the British Sociological Association Sociology of Religion (SOCREL) annual meeting.
- Pitts, W.L. Jr. (2009) "Women Leaders in the Davidian and Branch Davidian Traditions." *Nova Religio* 12(4): 50-71.
- Rochford, E.B. (2007) *Hare Krishna Transformed*. New York, New York University Press.
- Shaw, J. (2011) Octavia, *Daughter of God: The Story of a Female Messiah and her Followers*. London, Jonathan Cape.
- Schak, D. and Hsiao, H-H. M. (2005) "Taiwan's Socially Engaged Buddhist Groups." *China Perspectives* 59 (May-June).
- Stark, R. (1987) "How New Religions Succeed: A Theoretical Model." Pp. 11-29 in *The Future of New Religious Movements*, edited by Bromley, D.G. and Hammond P.E. Macon, GA, Mercer University Press. S
- Stark, R. (1996) "Why Religious Movements Succeed or Fail: A Revised General Model." *Journal of Contemporary Religion* 11(2): 133-46.
- Uotani, S. (2011) "'Lost Youth' Compensation Cases and Their Relation to Forced Conversion in Japan." Cesnur website http://www.cesnur.org/2011/dan_uetani.pdf. Pp. 1-10.
- Wallis, R. (1984) *The Elementary Forms of the New Religious Life*. London, Routledge and Kegan Paul.
- Williams, M. (1998) *Heaven's Harlots: My Fifteen Years as a Sacred Prostitute in the Children of God Cult*. New York, Eagle Brook.
- Wilson, B.R. (1967) "The Exclusive Brethren: A Case Study in the Evolution of Sectarian Ideology." in *Patterns of Sectarianism*:

Organisation and Ideology in Social and Religious Movements, edited by Wilson, B.R. London, Heinemann.

Whitehorn, D. (2009) "Origins of the Shambhala Working Group on Aging."

http://www.shambhala.org/community/aging/swgoa_origins.php

Yun, H. (2011) *Life: Politics, Human Rights, and What the Buddha Said About Life*. Hacienda Heights, CA, Buddha's Light Publishing.

注

① 訳注 キリスト・アデルフィアン派は、1848年頃、ジョン・トーマス (John Thomas, 1805-71) がアメリカで創始した教派。

② ここではこの論点を追究しないが、次のように主張することができる。メンバーが第一世代である運動に見出された特徴のうち多くのものが、発生当初のキリスト教徒、ムスリム、メソジスト、その他の新宗教運動にも当てはまるであろう。

③ 統一教会は文鮮明 (1920-2012) によって、1954年に韓国において世界基督教統一神霊協会として設立された。宣教師がヨーロッパと北米に派遣されたのは1950年代後半であったが、運動に加わる西洋の中産階級の若者 (後に「ムーニーズ Moonies」と呼ばれた) の人数が顕著なものになったのは、1970年代初期に文鮮明が米国で数多くの集会を催してからであった。

④ 1970年代前後に発生した実質的にすべての新宗教運動は、とりわけ初期においてメンバーの入れ替わりがきわめて激しかった (Barker, 1999; Bromley, 1988; Bird and Reimer, 1983)。年長のメンバーが去り、若者が入信したので、12カ月ごとに出される平均年齢には変化がない。

⑤ グラフ右側に小さなピークがあるのは、20代の息子達に続いて入信した親達がいることを示している。

⑥ ある運動に入信してカリスマの指導者達に帰依している人々は、自分たちは死なないと主張している (アリゾナに拠点を持つ Together Forever (Brown et al n.d. <<http://www.people-unlimited-inc.com/index.html>>) がその例である)。しかし現在までのところ、こうした人々の多くは100歳を迎えずに人生を終えている。

⑦ この調査結果については次のサイトで閲覧できる。

<http://www.freebuddhistaudio.com/ordersurvey>

⑧ この統計は2006年に Triratna Chairs Assembly によって実施された調査によるものである。この調査には全メンバーの約三分の一にあたる、約350人のメンバーが回答しており、教団メンバーの年齢、授戒年齢、性別、居住地を示してい

る。

(9) このグラフは調査を実施した教団のメンバーであるロカバンドウ (Lokabandhu) から著者が個人的に入手したものである。

(10) メンバーの高齢化と、やがて起こる創設者の死とともに、新宗教の人口統計的特徴が変化するだけでなく運動全体の構造と文化は抜本的な変化を蒙る。しばしば指摘されるのが、運動が多くの方で社会に適応していく時に起こる「教派主義化 denominationalism」のプロセスである。「彼ら」対「我々」の境界が徐々に越えやすくなっていき、距離感と緊張感が目立たなくなっていく。しかし、ブライアン・ウィルソン (Bryan Wilson, 1967, p. 235) が苦心して指摘したように、このプロセスが必ず生じるということとはまったくない。

(11) 訳注 シェイカー (Shakers) は 18 世紀に英国からアメリカに渡ったキリスト教の一派。整列して行なうダンス (降霊会) や特徴ある家具作りで知られている。

(12) 訳注 メイベル・バルトロップ (Mabel Bartrop) によって、1910 年代にイングランドのベッドフォードに設立された宗教集団。

(13) 英国の痴呆症患者は 8 万人に達すると見積もられている。近い将来この数字は急上昇し、首相が国民的危機と呼んだ事態へと至る。高齢者のケアに責任を持つ地方議会では、この状況は時限爆弾であるとされている。英国政府は、痴呆症の研究に要する予算が倍増し、2015 年までに 6600 万ポンドに達するという見通しを述べている (BBC ニュース、2012 年 3 月 26 日)。

(14) もちろん、社会に新しい課題をつきつけるのは、出生率の変化と、食生活と衛生や医療の条件による平均余命の変化だけではない。移民、戦争、その他の人災、天災も、社会の人口統計的なバランスを変化させる変数である。

(15) 「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」「マタイによる福音書」6 章 34 節。

(16) 「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。」「使徒言行録」2 章 44、45 節。

(17) 「調達 provision」という言葉は、運動のメンバー達が寄附をしてくれそうな相手に対して、自分達はキリスト教の宣教をしているのだと説明することでさまざまな日用品を手に入れる時に用いられる。それにはレストランでの食事、電器製品、家具、ベッドシート、そして時に医学的治療も含まれる。

(18) 終末についての彼らの信仰内容の簡潔な説明が聖書の引用とともにファミリー・インターナショナルの下記のウェブサイトに記されている。

<http://www.thefamilyinternational.org/en/about/our-beliefs/jesus-second-coming/ti-me-end>

(19) この表は Amsterdam (2010) に記載されている数字から作られている。メンバーが死亡する可能性は考慮されていないが、仮に 2010 年時点で 65 歳以上のメンバーが 2025 年までに全員死亡したとしても、費用はやはり 600 万ドル近くになる。より最近の調査 (Amsterdam, 2012) では次のような数字が出ている。18-19

歳（ここには16-17歳の約50人も含まれる。16歳がファミリー・インターナショナルに登録される最低年齢だからである）・230人、20-29歳・860人、30-39歳・734人、40-49歳・459人、50-59歳・1256人、60歳以上・574人。

(20) <http://www.paganfed.org/comsrv-hosp.shtml>

(21) <http://www.neopagan.net/Adopt-an-Elder.htm>

(22) <http://www.abhayaratnatrust.org.uk/>

(23) “Making it Happen” in “Senior Cohousing Facilitation / Development.”

<http://www.cohousingblog.com/2012/02/22/making-it-happen-senior-cohousing-facilitation-workshop/>

(24) <http://www.oshnews.com/2011/04/the-last-resort-meditative-hospice/>

(25) <http://directory.ic.org/21689/Rocinante>

(26) しかしながら、アーミッシュもクエーカーも、ベルギー政府のセクト（カルト）に関する報告書に記載されている180の宗教のリストに含まれていることを指摘しておいてもよいだろう（Duquesne and Willems, 1997）。

(27) ラウントリーは、カドベリー（Cadbury）、フライ（Fry）などととも、しばしば「クエーカーの資本家」と称される慈善家に数えられる。

(28) <http://www.jrht.org.uk/node/128>

(29) Claire Headley v. Church of Scientology International, et al. United States District Court Central District of California, Case no: CV 09-3987 DSF (FFMx) 4 February 2010.

(30) 集団訴訟の一つの成功例は、高齢の信者によるものではなく、クリシュナ国際意識協会の中で育てられた子供時代に虐待を受けたという若い成人達によるものであった。しかし、この訴訟は、運動を刷新し、同じような虐待を二度と繰り返すまいと決意した信者達の全面的な支援を受けていた（Rochford, 2007）。

(31) 故ハーバート・ローズデイル弁護士は、1988年から2004年に没するまで、アメリカ家族財団（American Family Foundation、現在は国際カルト研究会 International Cultic Studies Association）の理事長で、無料法律相談を提供し、新宗教運動がその会員、脱会者そして一般の人々に害を与えていると信じた数多くの訴訟で原告代理となった。

(32) 次の箇所を参照。“Death, After All” in Shaw (2011, p. 317-328).

(33) 数多くの文化や新宗教運動で、死者との出会いがあると主張されることは珍しくない。死後の世界との接触を信じるのが老後の健康と福祉に寄与すると示唆する研究さえある（Krause and Bastida, 2009）。

(34) ムンバイのバクティヴェーダンタ（Bhaktivedanta）病院はホリスティック・ケアを提供しており、フル機能のスピリチュアルケア科もあり、対象者は信者であるかどうかを問わない。プリンダーバンにはプリンダーバン・ホスピスがある。カルカッタ近郊にはマヤプール・ホスピスが計画中である。

(35) 第二世代の「組合化」の能力を説明する一つの要因は、彼らが水平的関係の中で育ってきた可能性が高いということである。逆に、彼らの親達は、仲間同士の真剣なやりとりを頻繁に阻害する垂直的なコミュニケーションと権威構造に支配されていたのである（Barker, 2005）。

③⑥ INFORM (Information Network Focus on Religious Movements

www.Inform.ac) は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに設置された少数派宗教についてのデータを収集しているチャリティ団体であるが、現在イギリスで活動中のものだけに限っても、1000を優に越えるそのような運動についての情報を有している。

掲載論文一覧

〈特集：老いに向きあう宗教〉

戸松義晴・安藤泰至・司会：堀江宗正
「超高齢社会における尊厳死—『宗教』の立場から考える—」

川島大輔

「老いを生きる〈わたし〉、他者、宗教—エリック・H・エリクソンを手がかりに—」

Masami Takahashi

「高齢化と宗教の老年学のおよび心理学的な考察—『生きがい』と『自分らしさ』のダークサイド—」

白波瀬達也

「あいりん地域における単身高齢生活と死—吊いの実践を中心に—」

川又俊則

「老年期の後継者—昭和—ケタ世代から団塊世代へ移りゆく宗教指導者と信者たち—」

猪瀬優理

「教団の維持・存続と少子高齢社会—信仰継承に着目して—」

アイリーン・バーカー

「新宗教における高齢化の問題—老後の経験の諸相—」（翻訳：高橋原）

〈継続特集：3.11 後を拓く〉

川上直哉

「3.11 以後の宗教の取組み」

黒崎浩行

「復興の困難さと神社神道」

〈学術動向〉

中野毅

「宗教の起源・再考—近年の進化生物学と脳科学の成果から—」

現代宗教 2014 2014年3月4日発行

発行者 (公財) 国際宗教研究所 ©国際宗教研究所
上掲論文は <http://www.iisr.jp/> よりダウンロード可能です